

# 農楽の音は夜空にとけた

## 報告◆日韓の地方自治研究の歩みから



むくげ



さくら

### [第2回]

池上 洋通

(「緑の風」編集委員)



▲ソウル西大門刑務所（記念館）入口

### ◇はじめに

報告の第二回目は、二〇〇五年に多摩研が呼びかけて行った韓国訪問の報告集から、私のルポに添削を加えて採録しました。日韓の共同的な地方自治研究の歩みの一コマとして理解してもらえると幸いです。

「アジア・太平洋戦争終結六〇周年 韓国訪問 平和と交流の旅」という名前を掲げた旅は、二〇〇五年八月一九日から二三日までの日程で、富士国際旅行社の協力で行われました。参加者は添乗員を含め二〇人、本文に記す事情で、多摩研以外の全国各地からの参加者が一〇人を占めるという多彩な顔ぶれになり、団長を私が引き受け、副団長には菊池一春さん（現・北海道訓子府町長）をお願いしました。団の事務局長は多摩研理事の森松徹夫さん、事務局次長は会員の酒見友樹さんがつとめています。いずれも若いメンバーでした。

### ◇旅立ち

二〇〇五年は、アジア・太平洋戦争の終結から六〇周年にあたりました。終戦の年に生まれた人たちが還暦を迎えたのです。私はかねてから、この年を記念した、集団的な韓国訪問を考えていました。

一九世紀から二〇世紀にかけて日本（大日本帝国）は、アジア支配のプログラムを進め、ついに南太平洋に至る地域を含めた大東亜共栄圏構想を立てて、ドイツ・イタリアと結んで世界を相手に無謀な侵略戦争を強行したのですが、その帝国主義的プランによる植民地の典型が朝鮮半島でした。その支配の跡を訪ね、過去の事実を確認するには「暦が還る」とされる還暦の年がふさわしい、と思ったのです。

私はすでに四回韓国に招かれていて、そうした遺跡にも接していましたが、このとき私の頭にあつたのは、若い人たちに見せたい、という思いでした。それには理由がありました。

## 「韓流ブーム」のなかで

その一つが「韓流ブーム」です。二〇〇四年に放映された韓国ドラマ「冬のソナタ」の大ヒットから始まったこの現象は、韓国俳優・ユンジュンの名を多くの人が知ると共に、「ユン様」という呼び方で現れた、韓国への関心を一気に強めることになりました。理由が何であれ、日韓の間で親近感が増すことは良いにちがいません。しかし、それによって過去から学ぶことを忘れてはならない、そう思ったのです。

それに加えてもう一つ、今後、若い人たちが、両国の国民・市民の間でどのように友好的な関係を生み出していくかについて、自治体の現場で率直に語り合いたい、という思いもありました。そこで、その部分の企画を友人のパク・キョン（朴瓊）氏に依頼しました。

氏はテジョン（大田）市にある大学で経済学を教えている研究者で、彼が東京大学に留学していた一九九〇年代から、すでに十年を超える交流をしており、自治体問題研究所との共同を強く望む立場から、私の訪韓のすべてのプランに関わってくれていました。農村と都市の両面から地域経済を研究していて、当時のノ・ムヒョン（盧武鉉）大統領のブレイン組織のメンバーでもあり、たちまち農村自治体への訪問企画を立ててくれました。

こうして四泊五日のプランが出来上がったのですが、この旅はそれまででない学びと感動とを胸に刻むものとなりました。以下は、その旅で詠んだ拙歌をまじえながらの報告です。

過酷にも立てし爪痕たしかめる

謝罪の旅と韓国（からくに）へ発つ

## ◇宮殿

訪問の最初の日には、公園や記念館になっている朝鮮王朝時代の宮殿や文化財を見学しました。私には二回目の経験でしたが、予期しない学びを得ることができました。それはビンビ（閔妃）殺害事件について、通訳が怒りを込めて生々しく語ったことが大きな理由です。

通訳はキム・スヨン（金壽榮）さんという女性で、日程の多くで解説をつとめてくれました。日本について深い知識を持ち、日韓関係の歴史についても教わることの多い人でした。初めは遠慮がちでしたが、旅の目的を伝え、ご自分の思いも率直に語って下さい、とお願いしました。

## ビンビ殺害事件

ビンビ殺害事件は、日清戦争直後の一八九五（明治二八）年一〇月八日に起きました。韓国・李王朝第二十六代王・高宗の妃ビンビが、宮殿に押し入った日本軍人や大陸浪人らによって殺害されたのです。背景には、当時の政治情勢がありました。日清戦争後の状況の下で、日本による内政干渉を嫌った韓国の政権がロシアに接近し、排日政策をとり始めます。これに危機感を抱いた日本公使の指揮によって、反日派の中心と目されたビンビの殺害が行われました。日本政府は事件を韓国政権内部の抗争として処理しようとしたが、国際的な非難が高まり、公使以下四人を帰国させて裁判にかけましたが、翌年一月、全員を免訴釈放してしまいました。一国の王妃（ビンビの正式名称はミョンソンファンフ明成皇后）を殺害した者たちを無罪放免にしたのです。

※私たちが訪韓した二〇〇五年の五月に、「明成皇后を殺害した者の子孫ら」を名乗る日本人が、皇后の埋葬されている洪陵を訪れて謝罪しています。事件から一一〇年目のことです。このときに子孫らは、墓地を訪れていた明成皇后の曾孫に対して謝罪しましたが、皇后の曾孫は「謝罪を受ける、受けないは、自分がすることではない。政府レベルの謝罪がなければならぬ」と語ります。この一部始終は、テレビ朝日系「テレメンタリー」で放映されました。しかし一方では、この事件を日本の犯罪としない意見が根強くあります。

## 力のない国に住む者の哀しみ

通訳のキムさんが、日本人向け観光の一般コースには入っていないが、殺害事件の現場を見てもらいたい、といったので、是非にとお願いしました。ところが残念なことに、そこは修築のための工事が行われていて、立ち入ることができませんでした。

しかしキムさんは、その工事現場のわきで、心を込めて事件の経緯を語り、日本の一部で主張されている誤った情報をたどりました。そして「力のない国に住む者の哀しみ」と言いました。その後も私たちは、その言葉を繰り返し聞くことになりました。

長い歴史を刻んだ宮殿の敷地にはさまざまな樹木が生い茂り、建物も庭も池も美しく、日本で放映されているテレビドラマのロケ地になったという風景がいくつもあって、そのどこからも蝉しぐれが耳に届きました。

やわらかきストーンくずさずされどなお

怒りにじませガイド語りぬ

## ◇絶叫

日本帝国主義による支配の象徴の一つとされてきた、ソウルの西大門刑務所の跡を見ました。建物の大半は撤去されて、敷地全体が記念博物館になっています。この刑務所に、植民地支配に抵抗してたたかった数多くの韓国人が投獄され、少なくとも者がたちが処刑されました。刑務所の一角に死刑場があったのです。

## 残っている死刑場

博物館は、当時の実態を再現することを重点につくられています。

複数の部屋に、拷問のようすをなまなましく表す蟻人形がおかれています。残されている文献や、生き残った当事者たちの証言に基づいて形づくられたものという説明を受けました。

私がそれ以上に深い衝撃を受けたのは、死刑場でした。それは再現ではなく実物がそのままに、絞首刑を行う装置も展示されていました。

一九一〇年の日韓併合条約によって植民地とされた朝鮮半島において、その圧政とたたかった民族運動の最大のものが「三一独立運動」です。

一九一九年一月に韓国の王であった高宗が死去すると、日本によって毒殺されたといううわさが流れ、韓国の人々の民族感情をつよく刺激しました。まず二月に、日本国内にいた留学生たちが「一・八独立宣言書」を発表して独立を訴えます。これに応えて、朝鮮半島内のキリスト教、仏教、天道教それぞれの教徒がデモ行為を行うことで合意、さらに学生達が合流していきました。そして「民族代表」の名で独立宣言書を作成し、内外に送付することにしました。

三月一日、代表はソウル市内の料理店において独立宣言書を朗読した

後、警察に自首します。一方、市内のバゴタ公園（タブオル公園）に集まった民衆は、「独立万歳（マンセー）」を叫んで街頭デモ行進を展開しました。この運動は、たちまち半島全体に広がって全民族的なものになりましたが、運動の高揚と共にデモ隊が警察署や憲兵派出所を襲うようになりまし。これに対して、植民地支配の権力・朝鮮総督府と日本政府は、半島内の憲兵・警察に加えて日本から軍隊を動員、暴行や虐殺など徹底した弾圧を行いました。ソウル市南部のテイガンリ（提岩里）で四月一五日に起きた事件はその一つです。デモ隊によって日本人の巡査一人が殺害されたのですが、これに対して日本軍が次のような残虐行爲を行つたのです。

### 提岩里事件

まず一五歳以上の男性村民に対して、将校が「訓示を与える」として教会に集まるよう指示しました。あらかじめ名簿を用意しており、来ない者を呼びにやっています。村民が集まったところで「キリスト教の教え」についての問答を仕掛けた後、将校だけが外に出て、窓から村民に銃撃をあびせて射殺、建物に石油をまいて火をかけました。飛び出してきた者はその場で射殺し、駆けつけた女性らを殺害しました。殺された村民は計二九人。さらに隣村に出かけた軍人たちは、天道教の信者六人を射殺しています。（人数については、資料によってわずかに差がある。）

この事件は、翌一六日に、異常事件を知ったアメリカ総領事館の領事、宣教師、AP通信の記者らが現地に入つて本国へ報告書を送り、さらに数日後にはイギリスの総領事館から現地調査団が送られて「日本軍による虐殺事件」として世界中に報道されました。これに対して総督府・日本政府は、問題の将校に対して三〇日間の重譴責（けんせき）処分にし

したが、その後の軍法会議では殺人・放火について無罪としました。

西大門刑務所には、数多くの三・一運動の抵抗者たちが投獄されました。通訳のキムさんは、拷問によって精神に異常をきたした女性の囚人について語ってくれました。彼女は、朝に夕に地下牢から「マンセー！」の絶叫を繰り返したといひます。その地下牢も再現されていました。

かつて刑務所を囲んでいた赤いレンガ塀の一部が残されていて、そこに博物館の出入口があります。記念写真を撮るといふことで、並んで塀の前に立つと、背後から「マンセー！」の叫びが聞こえてきた気がしました。思わずあたりを見まわすと、隣にいた若い友人がげげんな顔をして「どうしたんですか」とたずねました。

「マンセー！」の叫びいままなお聴こゆるか

赤き煉瓦に午後の陽の影

### ◇婦家

ナナムの家を訪ねました。日本軍による「慰安婦」についての資料を集め、保存し、事実を記録する歴史館であり、生存する元「慰安婦」の証言の場であり、生活の場でもあります。

「慰安婦」とは、日本軍兵士によって性的な処理の対象とされた女性たちであり、「性奴隷」といふべきだといふ有力な声があります。二〇〇五年現在で、韓国だけでなく東南アジアからニュージランドに至るまで、日本軍が侵攻した多くの地域で現地女性を「慰安婦」にしたことが判明しています。

### 「慰安婦」の真実

韓国の「慰安婦」問題が表面化したのは、韓国キリスト教系の女性団体

の人たちが一九八八年二月に、福岡から沖縄までの「慰安婦」の足跡をたどる調査を行ったことがきっかけでした。一九九〇年には、当時の社会党議員がこの問題を取り上げたのですが、政府は「民間業者が行ったこと」となどと逃げの答弁に終始しました。これに対して韓国の世論、特に女性団体が沸き立ち、三七の女性団体による対策協議会が結成されます。

これに励まされて九一年にはキム・ハクスン（金学順）さんが「自分は慰安婦だった」と名乗りを上げ、二人の元「慰安婦」と共に、日本政府に対して謝罪と補償を求める裁判を起こします。

そして九二年、中央大学・吉見義明教授の手で、旧日本軍による慰安所の設置や「慰安婦募集」を示す資料が、防衛庁の防衛研究所図書館から発見され、状況が一変しました。

日本政府は、官房長官が「日本軍の関与は否定できない」という談話を発表、宮沢喜一首相がノ・テウ（盧泰愚）大統領に対して公式に謝罪しました。さらにその後、二次にわたる調査を行い、九三年には「慰安婦」の募集、移送、管理などが「本人たちの意思に反して行われた」ことを認め、「お詫びと反省の気持」を表明します。

しかし、政府としての補償の要求には一切応じず、九五年に「女性のためのアジア平和国民基金」を発足させ、民間団体による保障手段をつくりました。これに対して韓国政府と女性団体など内外の四三団体が反対声明を発表、その後一部の者を除いてこの「基金」からの補償金の受け取りを拒否し、「基金構想」は破たんしました。

「慰安婦」についてももう一つ言わなければならないことに、教科書のことがあります。日本の中学生の教科書に記載されていた「慰安婦」の記事が、一部からの圧力に負けて、消えているのです。これについて、「新し

い歴史教科書」に関わっている学者が、「慰安婦」をトイレに例えて、「便所・便器の構造を歴史教科書に書く価値はない」という意味の発言をして、批判をあびています。

## ハルモニの涙

ハルモニとは、韓国で一定以上の年齢の女性に対する敬愛を込めた呼び方ですが、ナムムの家では元「慰安婦」をそう呼んでいます。むろん、韓国政府の調査に対して名乗りを上げた者のすべてが名前を公開しているわけではありません。そのなかで、勇気をもって裁判を起こしたり、自らの体験を具体的に証言している人たちがいるのです。私たちは、ナムムの家に住む一人のハルモニから、その体験を聞かせてもらうことができました。

高齢化しているそのハルモニは、言葉を選ぶようにして淡々と語りました。一〇代のときに強制的に連行され、暴力で性的な道具にされていたその経過の詳細を記すのは、別の機会にしたいと思います。ただ、彼女が一瞬言葉を途切らせて、軍人の暴行によって受けた脛（すね）の傷跡を私たちに見せてくれたときに、部屋を支配した空気が忘れられません。そのハルモニが、私たちと並んで写真に入り、談笑し、泣きながら別れを惜しむ若い女性たちの肩を抱きつつ、うるんだ目で私に向かい「必ず再会しましょう」という意味の言葉をいいました。日本語を叩き込まれた世代なのです。

ナムムの家の建立と維持には、少なくない日本人の物心両面にわたる参加があり、ボランティアとして常駐する日本人の男女がいて、役割を果たしていました。訪れる者の中には高校生もいて、日本の若者たちも少なくないと聞きました。二〇〇一年の数字では、全体で五三三三人

の訪問者があり、うち三二〇一人が日本人です。

娘らの肩を抱きつつハルモニが

目を潤ませたかの家の門



▲ナムの家に立つ少女  
像「咲ききれなかった花」

## ◇鎮安

韓国の自治体を訪ねて交流することも、旅の大きな目的です。これからの共同交流の展望をひらきたいという思いがあつたからです。それを受けて、はじめに記した友人のパク・キョン氏が用意してくれた自治体は、韓国中南部・全羅北道の農村自治体、鎮安郡です。

※鎮安郡はカタカナ表記ではチナンGun、ローマ字で Jihan-gun と

あるが、ここでは漢字表記に統一する。なお、韓国の地方自治制度については別の機会に解説するが、ここでは大ざっぱに、広域自治体に「道」と「特別市」があり、基礎的自治体のうち都市部が「市」、農村部が「郡」に分けられ、それぞれの市や郡のうちを「邑」や「面」といった区域に分けている、と理解してほしい。

鎮安郡の面積は約七八九km<sup>2</sup>。ソウル市が六〇五km<sup>2</sup>、東京二三区が六二

三km<sup>2</sup>であることを考えると、その広さが分かります。そこに約二万七千人ほどの人が生活している、そうした純農村地域でした。

パク氏が鎮安郡を訪問地に選んでくれた理由は二つありました。

### 村づくりの現場を見る

第一の理由は、自治体の長（郡では「郡守・グンシユン」）が民主的な思想の持ち主だということです。

鎮安郡の郡守はリン・シユジン（林守鎮）さんといい、農民出身のインテリで、韓国農民運動のリーダーとしてたたかい、投獄された経験もあるという人でした。お会いして談論し、数分も経たないうちに明るい人柄と知識の広さに胸を打たれる、そんな人でした。

第二の理由は、案内者が素晴らしいことでした。グ・ジャイン（具滋仁）さんです。グさんはソウル大学の大学院で修士課程を経た後、日本の鳥取大学大学院で森林学を専攻、農学博士の学位を得た人です。私に彼が日本に滞在しているときから知り合い、自治体問題研究所の自治体学校にも参加した経験がありました。そのグさんが、地域計画の専門研究職員として鎮安郡と契約して働いている、ということをお聞きしたのです。もちろんパク氏とも親しい関係です。そこで、日本語も達者だし、ガイドとして最高だ、ということになったのです。

しかも、グさんのプランによる「新しい村づくり」の現場を見ることが出来る—私の胸は躍りました。そして事実、鎮安郡での学びは、たった一泊だったのに、計り知れない豊かさをもたらしました。

### 住民の健康に奉仕する保健所

鎮安郡を見学するにあたって私たちは、参加者を二つの班に分け、一

この班の目的を保健所との交流にしました。じつは訪問者二〇人のうちの七人が保健師で、あらかじめ鎮安郡の公衆衛生政策について学びたい、という申し入れをしてありました。

私は、それまで三〇年近く全国規模の保健師の学習研究活動（保健師活動研究会）に関わっていましたが、二〇〇一年から若い保健師たちを対象に「二世紀塾」という年一回・二泊三日の研修を、長野県・穂高で行っており、そこには、全国各地から十数名の保健師が参加して、共に学び合い友情をはぐくんできました。その彼女らに「修学旅行」として韓国訪問への参加を呼びかけたのです。彼女たちの報告を読むと、一様にナムムの家で深く感動したことが書かれていましたが、同時に、鎮安郡の公衆衛生政策からも多くを受け取ったようです。

二万七千人ほどの人口で、中心となる保健所のほかに一〇カ所の保健支所があつて職員五〇人が配置されていること。利用期間に制限のないリハビリ施設、自由に利用できる高齢者のリラククス施設。さらに面積の広い自治体で、一六カ所の民間医療施設を補うための一二カ所の保健診療所など、けんめいの奉仕活動から学び、パソコンによる住民の生活などについての統計資料にも感心しています。また、伝統的な食事や生活習慣を重視した「韓方」の健康づくりの理論や実践も新鮮で刺激的だったと記していました。

## 住民のリーダーの報告から学ぶ

もう一方の班である私たちは、グさんに引率されて議会、職員労組、住民団体などを訪ね、卒直な交流をしました。どこでもあたたかな歓迎を受けましたが、特に住民団体には、画像を用意して分かりやすく活動を紹介してもらいました。それは、自らの手で新しい時代をひらこうと

する思いにあふれていました。

それは住民自治による村づくり計画を提唱する、グさんの政策理論の実践そのものでした。グさんは、外からの力に頼るのではなく、地域と住民自身の共同的努力による「内発的発展」の方向こそが村づくりの基本であると提案していたのです。それに応える住民のリーダーが現われつつあることが感じられる交流でした。

また、鎮安郡に二〇を超えるキリスト教会があり、その牧師さんたちの何人もが住民運動に積極的に関わっていることも新鮮でした。

※グさんによるこの政策理論の実践によって、その後鎮安郡の村づくりは大きな成果をもたらし、鎮安郡は全国で最も注目される農村自治体になっていくが、それは後の機会に報告したい。

## 酒・歌・踊りに酔いしれて

その日の夜私たちは、郡守が主催する晩餐会に全員が招かれました。それは、韓国農村の伝統家屋の形をした民宿の大広間で開かれましたが、そこが私たちの宿泊所でもあったのです。

じつは鎮安郡は、おおきな水害に遭ったばかりでした。けれどもリン郡守は、私たちを歓迎する心のこもったあいさつをして、未来に向かって共に歩んでいこう、と呼びかけてくれました。

答礼のあいさつに立った私は、終戦六〇年を期して旅の企画を立てたこと、かつての日本帝国主義の支配についてあらためて学んだこと、私たちの深い謝罪の思いを受け止めてほしいことを、そのまま語りました。そして、郡への水害のお見舞いとして、訪問者全員から集めた寄付金を贈呈しました。

リン郡守の年齢をお尋ねすると「甲回」という言葉が返ってきました。

甲とは干支を表し、回は還と同義、つまりは還暦ということ―郡守は終戦の年（韓国では光復年＝光がもどった年という）に生まれていたので。しかし、水害のために祝宴ができなかった、といわれました。そこで私が、今夜をその機会にしましょうというのと、「心から嬉しい」と言ってくれました。

その後は、私たち、それを上回る数の鎮安郡の人たち、それにテジョン市からかけたパク・キョン氏、グさんを交えた大宴会に―。

韓国の伝統酒に、日本のどぶろく（濁酒）に近いと思われるマッコリがあります。手づくりされたと思われるそれが、どんどん運ばれてきます。アルコール度がずっと低いこともあって、いくらでも飲める感じなのですが、これがじつにうまいのです。私がマッコリをほめると、パク氏が「韓国にはもつとうまい酒があります」というので、「それはそうだが、これはこれでうまい」といい返すと、「この人は、どのお酒についても良いといえます」と隣にいた妻がいました。

やがて韓国の伝統芸能パンソリが始まりました。楽器も交えて吟じる口承文芸のような趣のもので（日本の浪花節に似ているかも）、初めて接した私は、その声量の豊かさにおどろき感動しました。

日本からも歌や踊りを披露しましたが、圧巻は「農楽踊り」でした。

農楽（のうがく）は、文字通り農民の音楽ということで、素朴な民謡のたぐいですが、銅鑼や太鼓を鳴らしながら、地面の上で歌い続け、踊り続けるのです。日本でいえば、夜を徹して踊り続ける各地の夏踊りなどに似ているといえるかもしれません。

リン郡守をはじめ、だれもが一緒になって踊ります。もちろん私たちも輪の中に入り、真夜中まで踊り続けました。銅鑼の音も太鼓の音もか

け声も、すべてが夏の夜空にとけこんでいきました。

## ◇展望

鎮安郡の議会で交流したとき、日本における「新しい歴史教科書」が話題になり、朝鮮半島への強権的な植民地支配をはじめとする、日本帝國主義の侵略的・軍国主義的な行為の事実を否定する日本の歴史教科書について、韓国の人たちが深い関心を持っていることが、改めてわかりました。そのとき私が、自分が住んでいる日野市で、市民運動の力でまともな教科書採択を実現したことを語ると、大きな拍手がわきました。

本当の未来志向とは、過去の事実に向き合い、足元からの歩みを確実なものにすること、だからこそ地域・自治体レベルでの交流が重要なのだ、ということを確認した瞬間でした。

そして、こんなこともありました。

ソウルに泊まった夜。少し遅くなつてから、福団長の菊池さん達と、屋台店へ呑みに出かけました。ある屋台で、店じまいを始めていたオモ二（主婦）に酒と食べ物をお願いしました。すると驚くような大きな声で「ハイイー」といい、火をつけ直し、近くの店に走って酒を手に入れ、大きな巻貝を炊いてくれました。屈託のない明るい声が胸にしみます。

こんな話をする時、「カネのためだから当然だよ」という人がいます。そうかもしれません。けれども、平和でだれとも対等に商売ができること、それ自身が喜びではないだろうか、心からそう思いました。

「お酒」「ハイイー」明るい声で貝を炊く

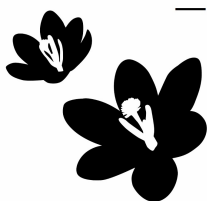
夜更け屋台の主はオモ二

（つづく）



# 宜野湾市長選結果から考える 沖縄の未来

— 県民の誇りと尊厳を確かなものにするため…



わくた ひろし  
湧田 廣

沖縄住民と自治研究会（世話人事務局）

米軍普天間飛行場問題を最大争点に一月二四日投票が行われた宜野湾市長選挙は、自公政権の全面的な支援を受けた現職市長佐喜真淳氏と翁長雄志県知事を先頭にしたオール沖縄勢力が支援する新人志村恵一郎氏の一騎打ちとなりました。

選挙の結果は 志村候補が二一、八一、佐喜真候補が二七、六一八で現職の市長の当選ということになりました。

宜野湾市長選挙は普天間飛行場の爆音公害やいつ墜落するかも知れないオスプレイの恐怖をなくし、基地の固定化を許さないという市民の切実な声が渦巻く中で、全国注視の選挙戦とマスコミでも報道されるものでした。

基地問題の他、経済政策や特に学校給食・医療費無料化・待機児童解消という子育て・教育にも市民の関心が高く両候補とも重点的に訴えました。

「辺野古新基地ストップ、普天間基地の閉鎖・撤去」を掲げる志村候補と「普天間基地の危険性除去、固定化を許さない」という現職市長佐喜真候補市民の間では解決策の道筋が浮き彫り

にならず判断に迷う状況が生まれていました。

特に現職市長佐喜真氏は辺野古新基地建設問題には一切触れないで移設は政府が決めることで、普天間基地の固定化阻止が最大課題と強調し「基地のフェンスをなくし政府支援の普天間の振興策が一番」と振興策を前面に押し出しながら、辺野古移設への言及を避け、「早期返還」を訴える戦略に終始しました。

この選挙戦略が功を奏し、現職市長の「実績と経済政策で再選」（タイムス）という結果になったのです。

オール沖縄の力で新基地ストップ、普天間基地閉鎖・撤去を全面に掲げた志村陣営は三ヶ月前の立候補表明から、政策をはじめ選挙態勢の構築と共同の取り組みに全力をあげました。告示をはさみ翁長知事を先頭に急速な運動の拡大を図り、移設によらない普天間基地の閉鎖・撤去、と政府が言及した五年以内の運用停止を迫り、基地からの爆音被害を除去すること、現市長になって爆音測定や基地対策協議会を一度も開かず、米軍の夜間飛行やルート変更

など勝手放題にさせている現状を厳しく批判し、残り三年以内の運用停止で爆音公害をゼロにするなど、切実な市民要求に沿った政策も打ち出しましたが、十分に浸透させることに至らなかつたとも考えられます。

選挙の結果については志村陣営の総括と分析結果が必要ですが、マスコミの論評等を見ると、普天間基地の移設是非を争点から外し、普天間の早期返還を訴えた現職佐喜真候補の知名度と実績のアピールが奏功したもので、辺野古新基地反対の民意は継続しており、安倍政権が強行している「辺野古容認」には結び付かないとの評価です。

実際、投票最終盤の両紙の世論調査でも宜野湾市民の七割が県内移設に反対し、国内外外への移設を求める数字が示されました。

しかし安倍政権側からは、佐喜真氏が辺野古への賛否を明言せず、徹底して争点から外したにも関わらず「直近の民意は辺野古容認だ」との声が出ており、政府が辺野古強行加速へ突き進むことが予測されています。

この選挙の結果は、今後の沖縄にど

う影響をするのでしょうか、

① 翁長知事が、裁判闘争を含む辺野古新基地反対の姿勢は揺るぎないもので、今後も県民の意志を日米政府に示し辺野古阻止の姿勢を堅持し、オール沖縄の闘いを進めいく決意を明言しました。

② 「普天間基地の固定化を許さず早期返還を実現する」とした佐喜真陣営・自公勢力の公約がどう実行されていくのか、安倍政権への対応とその実現性が問われる結果になったことも市民は注視することになります。

沖縄では六月に県議会議員選挙が実施され、続く七月には全国で参議院選挙が行われます。この選挙結果を受けてオール沖縄側の結束と体勢の強化が求められます。選挙戦でも保革の枠を超え、多くの政党・会派が一致して取り組んだように、翁長県政を支える「戦う民意」を強く、大きくしていくことが必要です。

自治権をないがしろにして、過剰な沖縄への基地押しつけ、民主主義と地方自治を否定す

る安倍政権の暴走を許さない闘いが一層重要になっています。

いま辺野古では昼夜たがわず埋め立て阻止の座り込み、海上での抗議が続いています。国が起こした代執行裁判、県の抗告訴訟の二つの裁判に加え、翁長知事は新たに国地方係争処理委員会の却下に対する不服とし、国を提訴する裁判を行うことを表明しました。

「沖縄の自治を守る闘いが日本の地方自治を守る」ことにつながります。

裁判闘争も、あらゆる手段を講じて辺野古新基地を止めるという翁長知事の強い決意の表れです。オール沖縄の歩みを確固たるものにしていく上で全国と連帯した民意を強く大きくする自治権確立のための取り組みが、沖縄でいま必要になっていることを痛感しています。



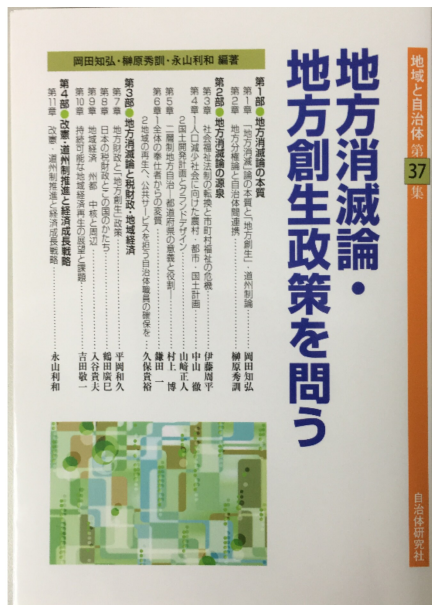
渡田 廣(わくた ひろし)  
1948年生。73年、那覇市役所職員。主に福祉部、環境部の業務を担当。那覇市職員労働組合書記長2期。2008年市役所定年退職。医療生活協同組合理事2年。現在、沖縄住民と自治研究会(世話人事務局)。

## 書籍の紹介



### 自治体再生めざす総合的研究

「自治体消滅論」は、二〇一四年五月に「日本創成会議」の「増田レポート」が二〇四〇年までに若年女性人口が五割以上減少する自治体を「消滅可能性都市」、うち人口一万人未満の市町村を「消滅自治体」として個別自治体名を公表したことによって注目されました。「コンパクトシティ構想」「ネットワーク型の連携」「道州制」「選択と集中」などの政策はこれと密接に結びついて



地域と自治体 第37集

### 『地方消滅論・地方創生政策を問う』

岡田知弘 榊原秀訓 永山利和・編著

自治体研究社、2015年  
価格（本体2,700円+税）

流布されました。本書はその「地方消滅論」と「地方創生政策」に学際的なメスを入れ、対抗軸を明らかにしています。

第1部は、「連携中枢都市」と「連携市町村」とに機能的に集約される地方再編の動向を分析し、現在の地方創生政策が安倍首相の「グローバル国家作り」の一環であることを明らかにしています。第2部は、人口減少のもとで地方自治体が抱える介護、子育て施策の危機的状況および国土計画の推移を論じています。第3部は、地方交付金など財政面か

ら地方自治体の再編過程を明らかにしています。第4部は、新自由主義的改革および改憲との関連で地方再編のあり方に論究しています。

本書のすぐれた点は、地方がもつ食料、エネルギー供給源、社会保障の受け皿としての可能性に着目し、その独自性を生かした再生を展望している点にあります。二〇〇三年に長野県栄村で生まれた「小さくても輝く自治体フォーラム」に集う小規模自治体の実践活動にみられる有機農業、森林エネルギーの活用、地球環境問題への取り組みなど、政策的対抗軸となりうる事例を知ることができます。

財政や法律の面からの分析はとくに関心を引く部分です。第5章の都道府県と市町村の二層制地方自治の法制度的位置づけの議論は、地方自治のあり方を考える上で不可欠であり、第9章の「道州制」が実施された場合の地方経済に及ぼす影響についてのシミュレーションは実証的な政策批判として貴重です。自治体研究の現段階の成果を知ることのできる好著です。

（本田浩邦 獨協大学経済学部教授）

## 教育改革のゆくえを見定める

いま日本で急速におこなわれている教育改革。学校統廃合、学校選択制、小中一貫校、道徳の教科化、全国学力テスト、ゼロトレランス、学制改革、教育基本法「改正」…、様々な問題が取り上げられています。その点と点を線にして、全体像をみせてくれるのがこの本です。この教

育改革は、グローバル経済が求める教育システムへの変換と云ってよいものです。

日本でこの教育改革を進めていくとどうなるのか。本書では、新自由主義教育改革の全米先行ケースでもあるシカゴ市の現状を確認することで、その答えを導き出しています。

簡単に言ってしまうと、エリートと非エリートを早期に分け、非エリートに対する管理体制が強化され、ま

すます貧富の差が広がっていきます。

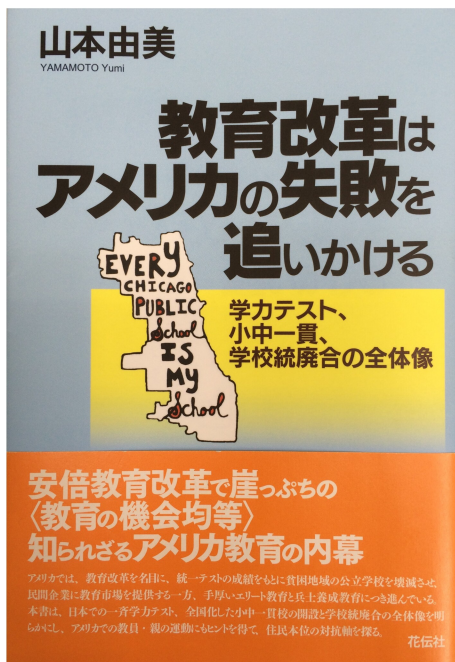
さらに公選制の教育委員会も市長の任命制となるなど、教育行政への市長の権限が拡大し、主権者としての声を出す機会が失われていきます。

すでにそのような状況になっているシカゴ市ですが、それらの問題に対して拒否や反対をする動きが保護者や教師たちを中心に広がっている事実もあります。それらの運動の現状や経緯についても、本書では詳しく取り上げています。

また、新自由主義教育改革のダメージをどう解消していくのか、その糸口はどこにあるのか。最終章では、それらについても触れています。

いま教育改革の真ただ中にある日本。その現状を把握し、またそれがいかに危うい状況であるかを知り、改善・修正・補足または方向転換していくかを考えるのに大変重要な一冊です。

(鈴木望 多摩研事務局)



『教育改革は  
アメリカの失敗追いかける  
—学カテスト、小中一貫、  
学校統廃合の全体像』

山本由美・著  
花伝社、2015年  
価格(本体1,600円+税)

# 残るべきか 帰るべきか

健 子島 神  
(かごしま・たけし)



vol. 32

吾輩は南三陸町で一年ぶりに再会したうら若き乙女(のネコ)のアキちゃんを旧交を温めていたにや。それを見たお伴の坊主頭は氣を使つてか、それとも頭の上からぬ吾輩からしばらく逃れるためか、「タマ、明日の朝、その駐車場に迎えに来るからな。いいか、朝いなかったら、多摩に帰れないからな。絶対戻れよ」というセリフを残して、ひとり車で宿へ向かつてしまったのだにや。

「あれがタマさんの飼い主か」「アキちゃん、飼い主だニヤンて。吾輩がヤツをお伴として連れてやつてきているのだにや」「にやるほど、タマさんらしいな。そうは言つても彼がいねえと、東京き嫌ねえ。いくら偉ぶつても、そこは人間様にはかなわねえ」「ま、ネコのつらいところだにや」と返したものの、痛いところをつかれたにや、少し話題の矛先を変える。

「まったく、坊主頭のヤツ、旅館の新鮮な海の幸を独り占めする腹づもりだにや、まったく意地汚い。吾輩にも食わせろつてんだにや」「は、そんなこと言つてるタマさんも意地汚ねえな」「ネコが新鮮にや魚介類を求めるのは自然の道理に適つているのでいいのだにや」

「そういえば、(南三陸の)志津川湾では、一時期、磯焼けが発生して漁獲量が減つたつて、漁師さんたちが困つてたことがあつたな」「吾輩も聞いたことがあるにや」「ウニの大量発生で、海藻を食べつくして磯焼けが起こるんだつて」(注・例えば、二〇一五年十月三十一日のNHKスペシャル「津波の海を潜る」でも、こういう説明がなされていた)「吾輩の知識が正しければ、その

説は間違いだにや」「えー、そうなのか?」「ウニの大量発生は磯焼けの原因というよりも、磯焼けの結果にやのだ」「え?」「岩石の表面を白くおおう、石灰藻という生物の大量発生を磯焼けというのだが、これが起こると、コンブやほかの海藻、貝なんかを着床できニヤいので、どんどん減つて最終的には死滅するのである」「へー」

「そうすると、移動できニヤいフジツボなんかは死んでしまうが、移動できるウニが辛うじて残つたわずかなコンブに群がってしまう」「ふーん」「ウニが大量にいても、コンブが大量に生えていて、両者が共存するのが普通にならぬが、そのバランスが極端に崩れているわけだにや」

「じゃあ、そのバランスが崩れた原因は、やつぱり津波なのか?」「おそらく、津波はそれ以前からあつた問題を顕在化させたに過ぎニヤい。元々豊かな生態系を持つ地域は、回復が早いというのか、むしろ元より元気ににやつたところもある」「へー」

「例えば、「森は海の恋人」というNPOで活動している畠山重篤さんは、気仙沼湾でカキの養殖をして

いるが、そこでは震災後にカキの成長が早くなつたと言っているにや。海水中のプランクトンが増えたからだにや」

「そこと志津川湾の具体的な違いは何なんだべ?」「吾輩は残念ながら、南三陸周辺の生態系に詳しいわけではニヤいので、はっきりとしたことは言えニヤい」「えー」「ただし一般論として、四日市大学の松永勝彦さんが説明しているところでは、石灰藻が大量発生してしまう原因は、腐植物質が足りニヤいことだにや」「フシヨクブツツツ?」

「うむ、腐植物質とは、腐葉土なんかにたくさん含まれている成分で、これが鉄分とつながることでコンブにやんかがたくさん育つと同時に、石灰藻の発生を抑制する」「へえ」「バランスのとれた森林の土壌には、腐植物質がたくさん含まれているのだにや。これが海の話とどう関係するか、わかるかにや」「えーと……と、アキちゃん、海と周辺の陸地を見直す。」

「わかつた。雨だべ」というと?」「森林に降つた雨が川や地下水を通して海とつながっている、つてことだべ」その通り、雨や風が森林の土壌のミネラルを川や地下水に運び、



志津川の袖浜より、志津川湾を眺める。



この子には悪いが、アキちゃんはもって可愛いのです。でもカメラが嫌いにやので写真は撮れず、別のネコで。

それが海へと注がれると、その海が豊かになるのだから。気仙沼のキ養殖がうまくいかなかった時、畠山さんは荒れた上流の山地を、元の生態系に近いいろんな種類の落葉樹を植林することで、回復させたのだにゃ」

「はー、だから「森は海の恋人」なのか」「その通り。まあ、今号の『緑の風』の特集に合わせて言えば、「森は海の恋人」に見られるように、海と森林、それをつなぐ川、その自然の循環を人間が維持し、あるいは回復していくことが、地域経済の循環においてもきわめて大切だということではニヤいかな」「今号の特集って言われてもオラにはわけわかんねえけどなあ……」「あらら、すみませんにゃ」

「面白かったけど、オラには堅い話で少し疲れたべ、話を戻していいか?」「なんだい」「仮に、だな、明日の朝、坊主頭さんにうまいこと会えなかったら、タマさんどうすんだべ」「どうすんだべって言われてもにゃー」「帰れねえべ」「帰れニヤいべな」。

明日の朝とだけ言われて、何時に来るのかからん坊主頭とうまく会えるのか、というのは実は吾輩も

心配しているところだにゃ。もつとも、時間を指定されてもネコは時計を持たぬので、あまり意味がニヤいのだが、少しでも目安があった方がマシだにゃ。いくら吾輩でも、ネコの本能/気まぐれで、ずつとここにじつとしていたとは限らニヤい。しかし吾輩が多摩に帰らニヤいで、この「タマの風」は続けられるのだろうか?

「んじや、いつそこに骨を埋めるか?」「んー……」。このことばを聞いて、あらためて吾輩はアキちゃんの顔をじつと見た。クリクリした眼を時折パチクリさせにゃがら、ニコニコして、何を考えているのか全く読めニヤい。読めニヤいけれど、「骨を埋める」という言葉にははつきりと聞き覚えがあった。

前に会った時に彼女は「オラ、別にここに骨を埋めるつもりもネえけど、オラのためにここに骨を埋めるつもりのあるヤツ(ネコ)とだったら、一緒になってもいいな」と言っていたからだにゃ(二〇一四年一月号)。これはもしや遠回しのプロポーズだったりするのだからにゃ? いや、妄想しすぎかにゃ、と吾輩いつにニヤク取り乱し気味であるにゃ。

よく考えると先月号の最後で、吾輩とアキちゃんがいい感じの雰囲気になつたところに坊主頭がやつてきたから、その雰囲気は吹っ飛んでしまったので、吾々の関係、結局どうなるのだかまだ分からニヤい。

「タマさん」「アキちゃん……」なんだよ、さつきから、オラの顔ジツと見ながら難しい顔したりニヤニヤしたり、二匹切で話してんに、妄想の世界に入り込むのはやめてけろ」「あー、いや、ごめんにゃさい。東京に戻るか、ここに骨を埋めるか」とやると、吾輩の猫生(=人生)を大きく変える岐路だからにゃ、いろいろ考えざるを得ニヤいのだ」「え、本気で残るつもりなのか?」と、アキちゃんは(たぶん)嬉しそうに言った。

「アキちゃんにそんなこと言われたら、考えてしまうのだニヤ」そうか、南三陸、いいところだべ?」「だからアキちゃんがいるからだにゃー」「え、何て?」

うーむ、聞いてニヤかったのか、とぼけているのか、やつぱり表情からは分からニヤい。「だからここにアキちゃんがいるからだ」と、もう一回言ってみた。(続く)

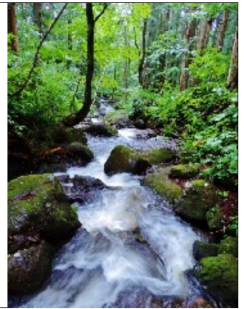


◆財政研究会

「地方創生～奥多摩町～」

2016年2月6日(土)

14:00～  
多摩研事務局にて  
報告者：師岡伸公(奥多摩町議会議員)



第24回議員の学校

世界と日本の情勢をつかみ、  
自治体・議会の役割を学び合う

～どうする？どうなる！地域と住民の暮らし～

- ◆「TPP『大筋合意』と地域づくりの戦略」  
徳島大学名誉教授 地域経済論 中嶋信氏
- ◆「『一億層活躍社会』と新年度国家予算/地域財政」  
立命館大学教授 地方財政・公共政策 森裕之氏
- ◆シンポジウム「『介護難民』・国保広域化と自治体はどう向き合うか」  
日野社会保障推進協議会 副会長 橋本輝夫氏・神奈川県職員 神田敏史氏  
コーディネーター 日本福祉大学教授、社会福祉学 石川満氏
- ◆グループワーク(政策交流会)「TPP/介護/国保—自治体の取組みを学び合う」
- ◆「住民生活の現実を見ずえて制作活動を進める」  
「議員の学校」学校長 自治体問題研究所理事 池上洋通氏

◇期日 2016年2月12日(金), 13日(土)

◇時間 1日目午後1時～午後6時15分 2日目午前9時15分～午後3時40分

◇会場 たましんR I SURUホール \* JR中央線・立川駅南口徒歩13分

◇受講料 28,000円 (割引あり、消費税込) 再受講26,000円/町村議員25,000円/  
多摩住民自治研究所会員23,000円/新規多摩研入会の方22,000円



石田泰さんを囲む会の様子(前列左から2人目が石田さん)

多摩住民自治研究所  
12月の活動

- ・10日(木)Excel講座会議
- ・11日(金)財政分析講座 議員の学校チラシ発送
- ・16日(金)事務局会議 緑の風編集委員会
- ・19日(土)第二回理事会
- ・25日(金)ホームページリニューアル
- ・28日(月)緑の風印刷・帳合・発送
- ・31日(木)石田泰さんを囲む会

※石田泰さんは、『緑の風』の「イタリアからの手紙」のご執筆をしていただいています。